

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	八塚 春名
論文題目	タンザニアのサンダウエ社会における環境利用に関する研究 ー狩猟採集社会の変容への一考察ー		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、タンザニアの半乾燥地域に居住し、農業を基盤とした複合的な生業を営むサンダウエの社会において、彼らが自然環境をどのように認識・利用しているのか、また、そのような環境利用を支える社会的な基盤はどのようなものかを長期のフィールドワークにより明らかにするとともに、そのような生業活動が成立した歴史的経緯および、現在進行している近代化による変容について議論することを目的とする。</p> <p>サンダウエは、クリック音を用いる言語をもつコイサン系の言語を話す民族であり、近年まで狩猟採集を基盤とする生活を送っていたと考えられてきた。サンダウエに関する初期の記述的研究には、少なくとも 19 世紀の後半には定住して農耕を営んでいたことが記されているが、彼らがいつ頃から定住農業に基盤を置いたのかを実証的に示す資料はない。いっぽう、言語や肌色の違いを根拠に、研究者や近隣民族はサンダウエを異質な民族であると見る傾向にあり、そのことはサンダウエの農耕が粗放だという印象としばしば結びついている。</p> <p>サンダウエの居住地域は、アフリカの乾燥帯と乾燥疎開林帯の境界上に位置し、タンザニア中央高地と呼ばれる地域に属する。不規則な降雨やモザイク状に混在する植生が特徴的であり、そのような環境下で、サンダウエは農耕を基盤とした複合的な生業を営んでいた。農耕は、トウジンビエとトウモロコシを中心に、複数の穀物が栽培されていた。乾燥に強いトウジンビエと、雨量があると収穫が良いトウモロコシを組み合わせる作物選択には、降水量の周年変動に対応する危険分散の工夫を見ることができる。また、栽培する穀物種の選択や組み合わせ方は、世帯ごとに大きく異なっていた。農業、牧畜、狩猟採集とも、異なる土壌条件により成立するモザイク状の植生分布を巧みに使い分ける形で行われていた。</p> <p>調査地の自然環境に関するサンダウエの認識について、植物名や地名の調査を行い、調査地域の複雑な植生が織りなす景観についての彼らのフォーク・カテゴリーを記載した。その上で、環境認識を示す分類語彙は村落あるいは民族内で共通であるが、個人の経験によって常に更新、改変されつつある動的なものである可能性を示唆した。</p> <p>タンザニア独立後に実施された集村化を契機として、人びとの土地利用は大きな変容を余儀なくされた。今日の土地利用体系を調べると、集住を強要された集村状態から、集村以前の土地利用へ回帰する傾向がうかがえた。そのような新たな農地の選択には、リネージなど社会関係に沿ったゆるやかな土地利用の秩序が反映されていることが明らかになった。</p> <p>サンダウエの食生活にとって非常に重要なニセゴマという半栽培植物に注目し、そ</p>			

の利用・管理・所有について調査した。他者の畑に生える植物を採集する場合の慣行と、乾燥保存した植物の所有や分配の具体的事例から、植物のやりとりが社会関係を構築する機会になっていることを示した。また、このような特徴的な食物のやりとりは、獣肉やハチミツ、あるいは栽培作物には見られないものであった。このような独特の慣行が、耕作地のみで生育するニセゴマに限っておこなわれているという点は、サンダウェ社会の諸特徴と農耕との結びつきの深さを示しているのかもしれない。

今日の社会経済的な変容に伴い、調査地では近年、それまでは利用されていなかった新しい場所に積極的に農地を開墾する人が現れ、その結果、土地保有概念の変化に加え、土地そのものに対する価値づけが変化している。こうした新しい動きは、土地利用に関する伝統的な社会関係と異なり、現金や村人間の個人的ネットワークなど、個人に付帯する社会経済的関係を利用していた。

サンダウェが多様な環境を多彩に利用していることの背景には、世帯ごとの収穫物の種類や量のばらつきを補う、交換や贈与という社会システムが基盤にあるが、そうした多様性や変異は、半乾燥地という不安定な気候条件への対応として有効であると考えられる。本論文はサンダウェの環境認識や土地利用、植物利用などといったさまざまな特徴が、いずれも農耕に密接に関連していることを示した。このことは、他のコイサン系狩猟採集民とは異なり、サンダウェが政府の開発政策や外部経済の影響から相対的に独立した形で、自律性を保ちながら、農業を基盤とする社会への移行を成し遂げたことを物語っているのかもしれない。

(論文審査の結果の要旨)

主として南部アフリカに分布するコイサン系諸民族の一部は、近年まで狩猟採集を主たる生計活動として暮らしていた。しかし、20世紀後半になると、その多くが国民生活の近代化と貧困解消を目指す政府の開発政策によって定住化を強制され、政府からの経済的支援と慣れぬ農業活動に生活基盤を依存するようになった。このような状況は、人々の独自の文化や生活を維持した上で近代社会への参加を促す「先住民運動」を進める立場からは、辛辣な批判を受けるようになる。現在、南部アフリカ諸国ではこのような対立が先鋭化し、問題解決の糸口を見いだせずにいる。

東アフリカに位置するタンザニアには、コイサン系民族であるハツァとサンダウエという二民族が飛び地のように分布している。南部アフリカ諸国とは異なる政治状況の下で、この二民族は、それぞれ独自に政府や国際社会からの影響を受けてきた。ハツァは、政府からの度重なる定住化への圧力にもかかわらず、今日も狩猟採集生活を維持しており、そのために文化観光の対象となり、相当の現金収入を得ることが可能になっている。いっぽうサンダウエは、19世紀末の欧米人探検家との最初の遭遇時においてすでに農業を行っており、そのためかそれ以後国際社会からの注目を受けることはなかった。本論文は、比較的早期に農耕を基盤とした生活を確立したと考えられるサンダウエに注目し、コイサン系諸民族の近代化問題を、別の視点から検討した意欲的な試みである。

本論文はまず、サンダウエが農耕を始めたのはいつか、という実証困難な問いを棚上げし、現在タンザニア中央高地の独特な環境下で営まれているサンダウエの農業実践をつぶさに記述することを試みる。サンダウエの農業は、土壌条件により分類される複数のモザイク状の植生分布に従って、在来のトウジンビエに近年導入されたトウモロコシを組み合わせた複合的なものであった。集約化をあえて図らず、複数の作物を組み合わせて作付けすることで、不安定な降水への危険分散を行っているとは解釈できる。

サンダウエは、時に自らを狩猟者であると言い、畑の作物が不作の時でも狩猟採集によって食物を得るので飢えることはないと言っている。成人男性は今日でも外出時に弓矢を携帯するなど、サンダウエの暮らしのなかに狩猟の文化的重要性を確認することは容易である。しかしながら、現実の生計はほとんどが畑からの収穫に依存しており、主要な環境分類語彙の説明が農業実践に基づいていたこと、ニセゴマという畑にのみ生育する雑草を巡って独特な交換システムが発達していることなどは、サンダウエ社会の中に、農業由来の概念や実践が深く根付いていることを示唆している。

本論文は、サンダウエの農業実践が常に変化を経験してきたという動的な側面も明らかにした。今日観察されるサンダウエの農業実践は、タンザニアの独立後1970年代初頭に大規模に行われたウジャマー村政策によってもたらされた大きな変化の結果としてある。それまでクラン単位で広く分散して暮らしていたサンダウエは、主要道路

沿いに集住させられ、異なるクランが混在する集村での暮らしを余儀なくされた。また、トウモロコシの栽培が定着したのもほぼ同時期であり、今日の形の農業システムが成立したのはこれ以後のことであると推測される。ウジャマー村政策が影響力を失った現在、以前の土地利用に回帰する動きもあるが、いっぽうで、市場経済化に器用に適応した若者が、既存の価値観を変化させ、新たな土地利用を実践している逞しい姿も本研究は捉えている。

このように、おそらくは近隣農耕民や牧畜民との交流を通じて、少なくとも 19 世紀後半には農耕に依存していたサンダウエは、その後もウジャマー村政策による集住化を大きな変化の契機とし、今日でも市場経済の浸透といった外部からの影響に対応しながら変化を続けている。南部アフリカのコイサン諸民族が直面している急激な変化への不適応とは対照的に、サンダウエがみせる社会変容への頑強さは、大きな変化に対して比較的ゆっくり時間をかけながら、また開発政策や国際的な先住民支援の動きなど外部からの介入から比較的自由に、自律的に対応してきたことの結果なのかもしれない。本研究が明らかにしたサンダウエの自律的な現代史的経験は、「先住民」諸民族が近代化に対して取り得る一つの選択肢を具体的に示している。

以上のように、本論文は本研究科の研究成果としてふさわしい内容を備えた、優秀な論文であると判断できる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 23 年 1 月 20 日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。